

アメリカン・キルトの研究(3)—1847年「署名入りの星」について 尚綱女短大生活 玉田 真紀

目的 前回の報告では西部開拓期の生活とキルトの役割について述べた。その際、共立女子大学所蔵1847年作の「署名入りの星」について年代から推察して東部から西部へ移動する者のために作られたフレンドシップ・キルトではないかと考察したが、その後、サインの名前の関係などからこのキルトの位置付けが多少明らかになったので、その結果を報告する。

方法 「署名入りの星」を理解するため、サイン入りのキルトがなぜ作られたか、さらに、共同作業で作るキルティング・ビーはどのような習慣であったかを文献資料により考察した。また、キルトのサインにあったニューヨーク州フーシック町に、サインにある人物が当時実在したか、いつまで定住したかなど調査を依頼した。

結果 「署名入りの星」には全体の右上部分にHelen M.L.Armitage, Hoosick N.Y.1847のサインと64ブロックにある星のパターンの中央には、姓名、町、州のサインがインクで書かれている。「初期フーシックの歴史」の著者C. W. ファーキンズIII氏により、このキルトを計画したヘレンと、すぐ下にサインがあったベンジャミンは後に結婚していること、また、親戚関係と思える姓がいくつか見られることがわかった。1856年の地図にヘレン一家の農場は記載されていた。保存状態もよく、柄の配置まで念入りに作られたこのキルトは、花嫁用具を入れるホープ・チェストに入れたブライド・キルト（花嫁のキルト）の可能性が強い。